

# 目的別系譜図にみる景観研究の動向 —08年から17年を対象として—

柴田 久<sup>1</sup>・齋藤 勝弘<sup>2</sup>・池田 隆太郎<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 博(工) 福岡大学工学部社会デザイン工学科(〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8-19-1,  
E-mail: hisashi@fukuoka-u.ac.jp)

<sup>2</sup>学生会員 学(工) 福岡大学大学院工学研究科(〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8-19-1,  
E-mail: td184007@cis.fukuoka-u.ac.jp)

<sup>3</sup>正会員 修(工) 福岡大学工学部社会デザイン工学科(〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8-19-1,  
E-mail: rikeda@fukuoka-u.ac.jp)

本研究では2008年から17年までの10年間に発表された景観研究論文を対象に、研究目的別の系譜図を作成した。さらに先行研究の成果を踏まえ、作成した系譜図に対する考察から、景観研究の動向と今後の課題について検討した。その結果、景観研究論文として484編が選出され、35の研究視点による目的別研究系譜図が導出された。さらに景観研究の動向について考察し、今後の課題として自然的・伝統的風景の保全と生活基盤施設整備との整合、防災事業と景観の魅力の両立、有効な景観デザイン事例を可能にした人的体制や制度、調査・計画論上の工夫点について研究成果の蓄積が求められることを示唆した。

**キーワード:** 目的別系譜図, 景観研究, 動向, 研究視点

## 1. はじめに

景観法の成立から約13年が経過した我が国において、2011年には東日本大震災による甚大な被害をもたらされ、深刻な人口減少や地方都市の活性化など、多くの課題が山積している状況にある。景観研究の分野においてもこうした我が国の課題や状況の変化にいかに対応していくべきか、さらには貢献すべき研究の展開や方向性など、今後に向けた研究のあり方について論じられなければならない時期に来ているものと考えられる。

筆者らは1960～98年、続く1998～2007年を対象に、それら期間ごとの景観研究の系譜図を作成し、その動向について考察を行っている<sup>1)2)</sup>。本研究ではこれらの継続研究として上記問題意識を念頭に、2008年から17年までの10年間に発表された景観研究論文の目的別研究系譜図を作成し、先行研究<sup>1)2)</sup>の成果を踏まえながら各系譜図の動向と今後に向けた研究課題について考察することを試みる。

## 2. 研究手順

### (1) 対象研究の選定と内容の整理

系譜図の作成に当たり、2008～17年までに発表された

主要な審査付き論文として、土木学会論文集 D, 土木計画学研究・論文集(土木学会論文集 D3), 日本建築学会計画系論文集, 日本都市計画学会学術研究論文集, 日本造園学会「ランドスケープ研究」, 日本造園学会「ランドスケープ研究(オンライン論文集)」を選定し、その中からタイトルのキーワード検索によって景観研究論文を抽出した。検索のキーワードは先行研究<sup>1)2)</sup>と同様に「景観, 風景, タウンスケープ, 空間把握, スカイライン, 眺望, 視覚, 視空間, 都市デザイン, 空間デザイン, デザインガイドライン, 伝統的保存, 保存地区, 保存行政」の計14を設定している。次に検索によって抽出された研究内容を精査し、視覚障がい者の空間認知といった障がい福祉に関する研究等を除外した。これらの抽出結果と土木学会・景観・デザイン研究論文集, 土木学会論文集 D1 の全掲載論文をあわせ、計484編の論文を選出し、対象論文として収集した。

系譜図の作成方法として、選出された論文を精読し、①背景・目的, ②対象景観, ③分析方法, ④結論, ⑤課題, ⑥参考文献(本研究では研究目的に着目した系譜と経年的推移の把握を主眼としているため、主に研究の背景に記述された研究意義, 方向性, 着眼点等に直接影響を及ぼしたとされる文献を抽出し、関連・類似した既存研究の概観等については除外している), ⑦その発展面・相違点等、研究内容を整理した。

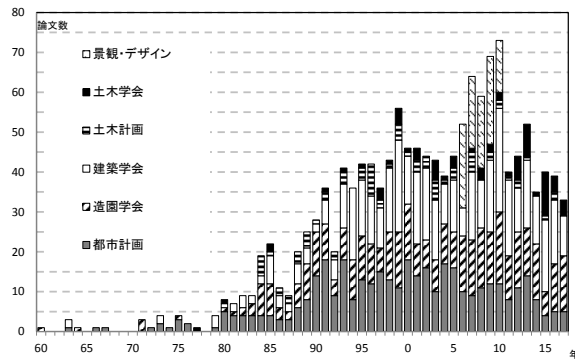


図-1 選出論文数の推移

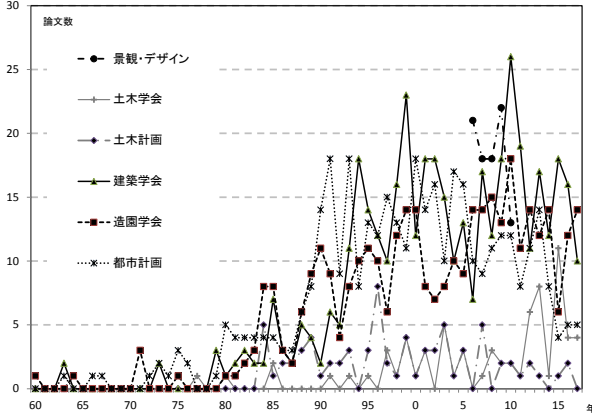


図-2 学会ごとの論文数の推移

表-1 研究視点

1. 景観素材・資源の管理利用	19. 景観・風景の概念追求
2. 自然景観への影響把握	20. 多面的景観論の提示
3. 景観保護の意味を明示	21. 変動要因の影響把握
4. 歴史的景観の保存	22. 変遷景観の特性把握
5. 制度の運用に対する評価・有効性の把握	23. 歴史的な所の景観特性の把握
6. 動向・現状の把握	24. 設計・計画思想史の解明
7. 事業効果の把握	25. 維生景観の史的解明
8. 評価軸の検討と方法論の確立	26. イメージ・認識構造の把握
9. 属性による評価への影響・把握	27. 原風景・心象風景の把握・応用
10. 「住民」を中心とした計画づくり	28. シミュレーションシステムの開発
11. 日常スケールでの計画づくり	29. 視覚的效果・影響の測定
12. 合意形成手法の検討	30. 色彩の調和
13. 調査手法における安定性の検討	31. 眺望を確保した計画づくり
14. 空間構造の把握	32. シークエンス景観特性の把握
15. 地方固有要素の構造解明	33. テクスチャの応用
16. 景観構成要素と全体評価との関連性の把握	34. 視覚認知特性の解明
17. 景観類型の抽出	35. 文化的景観の保存
18. 有効なデザイン手法の提示	

## (2) 分類と系譜図の導出

本研究では景観研究の目的と内容の整理に加え、それらの全体的な動向把握を目的としており、選出した論文を通観したうえで、上記項目中①背景・目的に着目し、KJ法による分類を試みた。さらに④結論を考慮しながら、⑥参考文献、⑦発展面・相違点に着目した景観研究の系譜図を導出した。また景観研究の経年的整理とともに、それら動向について述べた。分類に際し①に着目した理由は、系統的な研究動向を最も反映させていること、研究者が持つ問題意識を浮かび上がらせることで、景観に対する論点を明確に出来ると考えたためである。

## 3. 目的別研究系譜図の導出と研究動向

### (1) 選出論文数の推移と分類

選出された景観研究について論文数の推移を図-1に示す(なおここでは研究動向を明確化するため、先行研究<sup>12)</sup>より1960年からの論文数推移の結果を加えている)。先行研究から90年代は景観研究の拡充期とされ、99年にピーク(全論文数56編)を示した後、00~05年までの6年間では39~46編程の安定した発表が行われ、07年には60編を越え、10年には73編にまで達していることがわかる。しかし、11年からの論文数は減少傾向にあり、17年には33編の研究数となっている。

次に学会ごとの論文数の推移を図-2に示す。これより都市計画・造園・建築分野では、過去20年以上に渡り、年間平均10編以上の安定した発表がなされ、97年までの約10年間では都市計画と建築において増減の年変動が対照的な傾向を示していた。これに対し、08年からの10年間では都市計画と建築の論文数変動はやや類似した傾向も示され、逆にこれら2つの分野と造園学分野との対照的な論文数変動が看取された。また11年には全分野の論文が揃って減少に転じているが、東日本大震災の影響や景観・デザイン論文集の土木学会論文集D1(景観・デザイン)分冊(随時投稿可)への移行も一要因として推察される。

### (2) 系譜図にみる景観研究の変遷

先行研究に基づき、論文内容の精査によって得られた35の研究視点を表-1に示す。以下これら35研究視点ごとに導出された研究系譜図をもとに、その動向について述べる。

#### a) 自然的、歴史的景観保全に対する制度的現状の把握

まず[景観素材・資源の管理利用]研究は、ここ10年ほぼ連続して行われており、樹林地や農地、生垣を対象とした論文が複数見られる。16年には地域資産としての棚田・段畑の保全を念頭に、石積み技術の継承を論じた研究が見受けられる<sup>3)</sup>(図-3)。一方、より暮らしや生業との関連性から景観保全を論じる[文化的景観の保存]研究がここ10年の確立した研究視点として抽出されている(図-3)。論文数も38編が該当し、伝統的な集落や河川、水路などが主な対象となるなか、中山間地域の茶園景観に関する研究<sup>4)</sup>やアンデス<sup>5)</sup>、イタリア<sup>6)</sup>といった海外事例、さらに17年には四万十川の文化的景観保全に向けた大規模太陽光発電施設計画の対応についても考察がなされている<sup>7)</sup>。一方、98~07年では特に建築分野において一定数の研究がみられた[歴史的景観の保存]は今期も21編抽出されている(図-3)。これまでと同様に伝統的な集落や建造物群の景観を対象とす

るものが多いなか、京都北山の山容景観<sup>8)</sup>や庭園の樹林景観<sup>9)</sup>など、自然地に対する論考もみられる。

また主に景観行政に対する「動向・現状の把握」研究がほぼ毎年行われており、伝建地区<sup>10)</sup>や景観計画運用にかかわる報告、課題等の整理が行われている<sup>11)</sup>。一方、類似する研究視点として「制度の運用に対する評価・有効性の把握」も53編抽出され、08～12年までは、ほぼすべての研究で景観法の運用課題や可能性についての言及がなされている(図-4)。一方、12年以降では景観法の運用実態や限界を明確化したうえで、課題解決に資する事例検証型の研究が増加している<sup>12)</sup>。そのほか景観を巡る政策と自治基盤の再構築の関係性を明らかにしたもの<sup>13)</sup>やイタリアのウルバーニ法典に着目し、景観の定義や許認可等の観点から、従来のガラッソ法における景観計画との違いについて明らかにしたもの<sup>14)</sup>等が見受けられた。

#### b) 景観整備に関わる事業効果と合意形成

次に景観整備に関連した「事業効果の把握」研究も行われ、特定エリアの具体的な整備事業を対象とする他、都市デザイン教育<sup>15)</sup>や景観デザイン審査<sup>16)</sup>、アートプロジェクト<sup>17)</sup>など、人的なソフト事業の成果について論じたものが散見される(図-4)。また把握しにくい景観整備効果の発現傾向をプロセスモデルに基づく分析によって検証した研究もみられた<sup>18)</sup>。また景観形成の経済効果を基に景観整備方策の提案を行った研究<sup>19)</sup>やグリーンインフラの概念に基づき浸透性街路空間デザインの導入効果を流出抑制の観点から明らかにした研究等<sup>20)</sup>が見受けられる。

まちづくりにおける住民参加が一般化したなか、「合意形成手法の検討」や「住民を中心とした計画づくり」に関する研究も散見され、建築系研究者による論考が比較的多い(図-4)。従来からの策定プロセスに対する事例検証型<sup>21)</sup>に加え、クラウド型のVRシステムの有用性について論じた研究<sup>22)</sup>など、情報共有技術の進歩も見受けられる。一方、東日本大震災後の気仙沼市内湾地区における防波堤計画の合意形成プロセスについて検証した研究もみられる<sup>23)</sup>。また上記インターネットの普及やコンピュータ性能の向上と相まって「シミュレーション・システムの開発」研究も継続的に行われており、江戸の都市景観を再現する成果<sup>24)</sup>によってCG(Computer Graphics)の有効性を例証した研究が行われている(図-5)。

#### c) 景観変容と評価手法の検討

史的考察を中心とした「変遷景観の特性把握」研究は14編抽出され、神楽坂花街の町並み<sup>25)</sup>、京都鴨川納涼場<sup>26)</sup>について明らかにしたもの等がみられる(図-5)。一方で近代以前を対象とせず、1960年代の福岡市の都

市戦略について論じた研究も行われている<sup>27)</sup>。同様に歴史研究の視点をもつ「設計・計画思想史の解明」は31編抽出され、6編であった98～07年に比べて大幅に増加している(図-5)。ここでは国立公園行政における多島海景観としての松島の評価を文献調査より考察したもの<sup>28)</sup>や近世竹田における城下町設計の論理<sup>29)</sup>について明らかにした研究が見受けられる。また比較的に関西地域の事例が研究対象として多く取りあげられているなか、その後の道路計画に影響を及ぼした戦前期大阪の公園道路網計画<sup>30)</sup>や大正期の琵琶湖南部における景勝地の保護<sup>31)</sup>について論じた研究がみられる。一方98～07年には抽出されなかった「植生景観の史的解明」研究が8編、造園分野において発表されている。また「変動要因の影響把握」を視点とした研究も10編みられ、景観構造の変動によって与えられる気温への影響を検証したもの<sup>32)</sup>などが見受けられる(図-5)。

一方「評価軸の検討と方法論の確立」研究が27編、「属性による評価への影響把握」研究も12編抽出され(図-6)、98～07年に比べてやや論文数の減少が把握される。評価軸の検討に関しては、既に建替えが完了した団地の民間分譲敷地において、継承すべき景観の種類や継承時の留意点を明らかにした研究<sup>33)</sup>や都市内高架橋の事後景観評価手法<sup>34)</sup>や構造物の景観評価における「文脈効果」<sup>35)</sup>の影響に着目したものがみられる。また「属性による評価への影響把握」は比較的造園学分野での成果が多く見受けられ、茶園景観に対する日中の来訪者認識の違い<sup>36)</sup>やグリーンツーリズムへの展開<sup>37)</sup>など、観光を意識した研究が行われている(図-6)。

#### e) 景観設計に資する方法論の記録と視覚的景観論

98～07年では20編抽出されていた「有効なデザイン手法の提示」研究は、今期15編抽出され、歴史的ボーストリングトラスを転用したりんどう橋<sup>38)</sup>や橋梁用防護柵<sup>39)</sup>といった土木構造物に関わる成果が見受けられる。一方でこれら有効なデザイン手法の提示研究は2010年以降の8年間では2編にとどまっている現状が見て取れる(図-6)。一方「シーケンス景観特性の把握」研究は継続的に行われており、近年では造園分野での発表が盛んとなっている。フラクタル解析による景観分析<sup>40)</sup>が散見されるなか、研究のほとんどが景観画像を用いた分析アプローチを採用している(図-6)。また「視覚認知特性の解明」、「視覚的效果・影響の把握」は98～07年と同程度数の研究が行われており、「眺望を確保した計画づくり」の抽出数は8編から19編に増加している。一方、「歴史的な所の景観特性の把握」研究も散見され、信仰地としての三輪山の景観<sup>41)</sup>や十返舎一九「金草鞋」の読み取り調査から鎌倉観光を論じた研究<sup>42)</sup>などがみられる(図-7)。また「景観構成要素

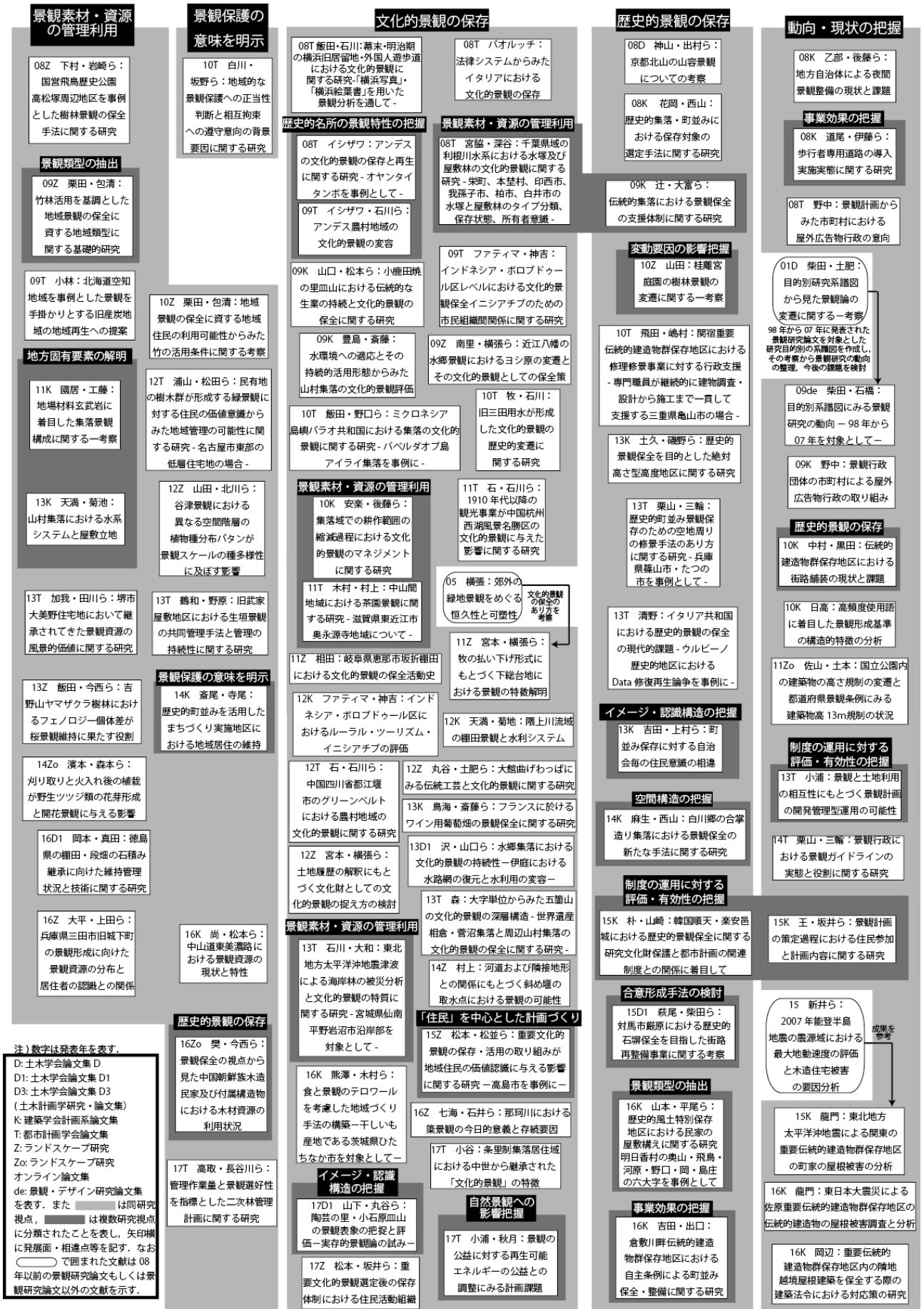


図-3 研究系譜図(景観素材・資源の管理利用、景観保護の意味を明示、文化的景観の保存など)

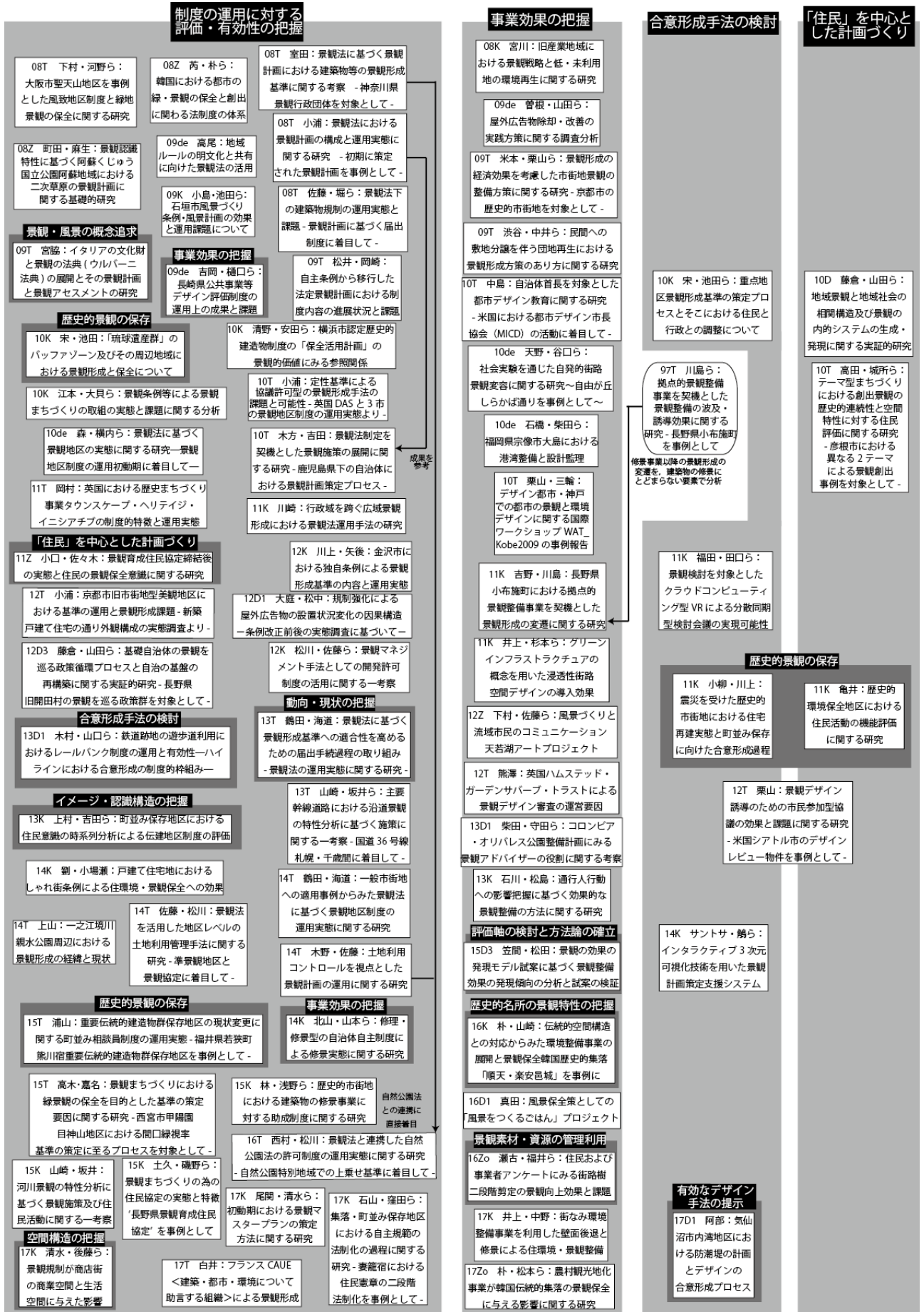


図-4 研究系譜図(制度の運用に対する評価・有効性の把握, 事業効果の把握, 合意形成手法の検討など)

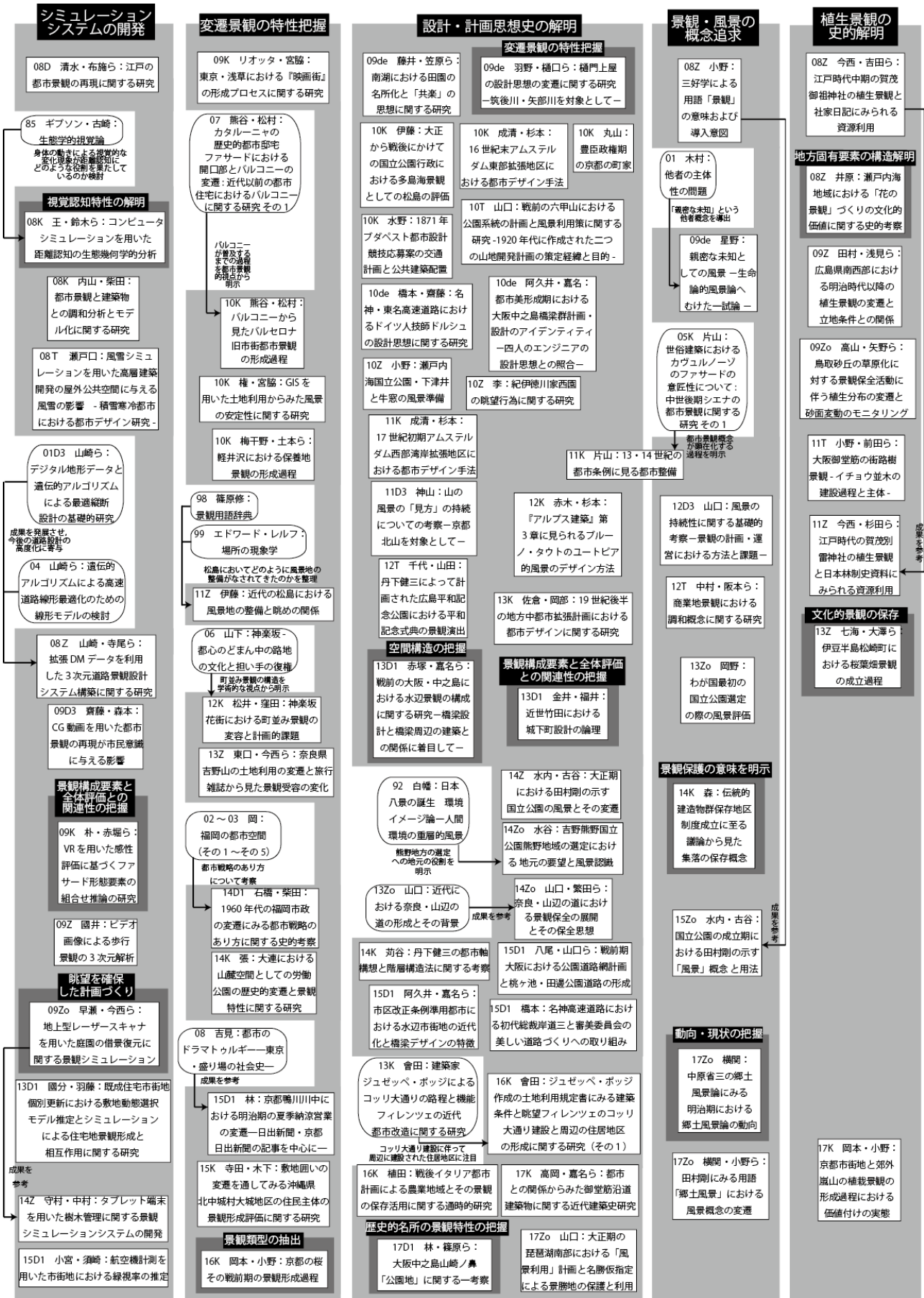


図-5 研究系譜図(シミュレーションシステムの開発, 変遷景観の特性把握, 設計・計画思想史の解明など)

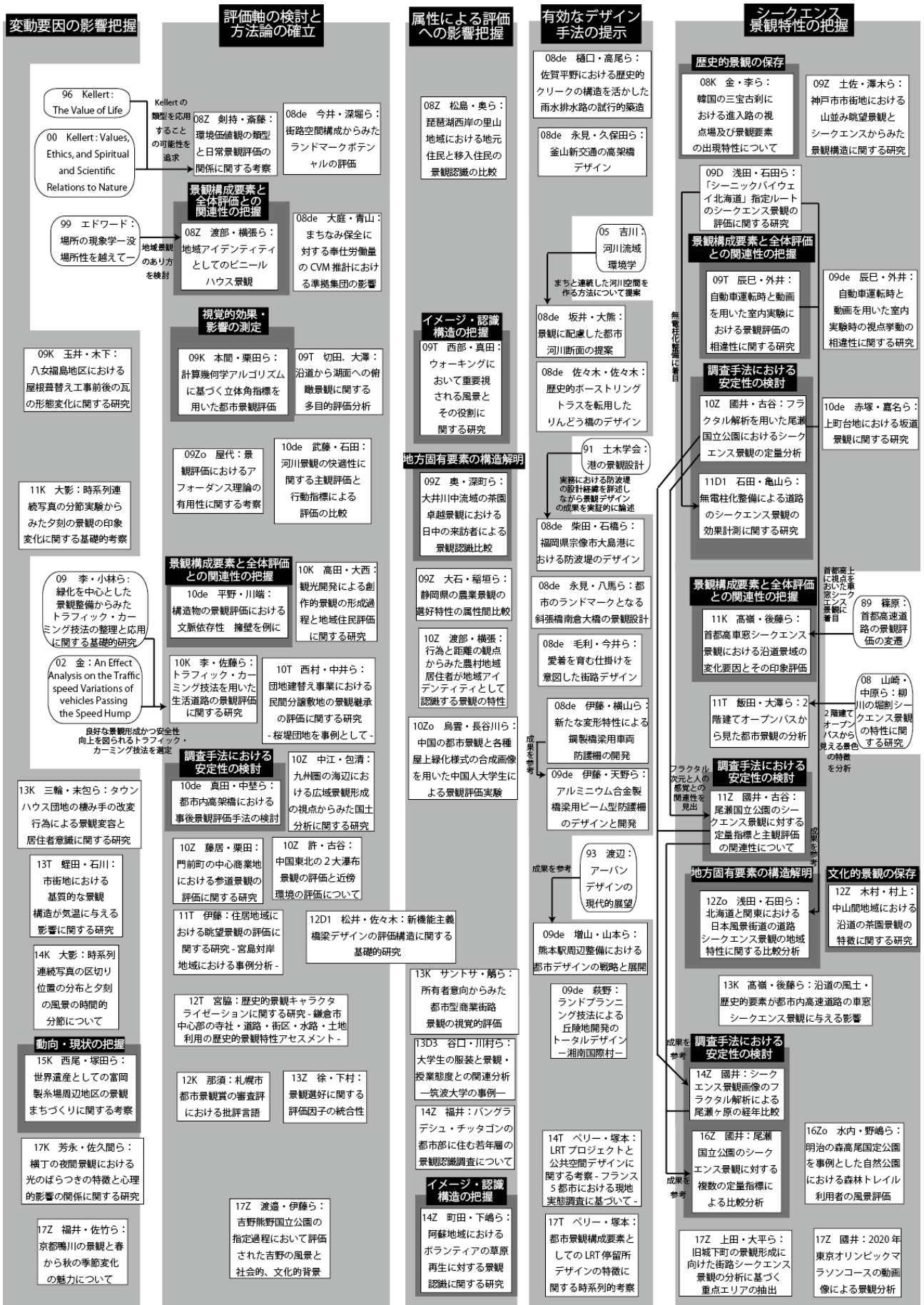
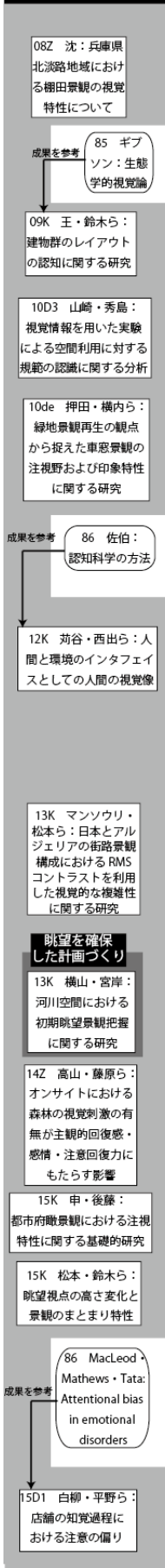
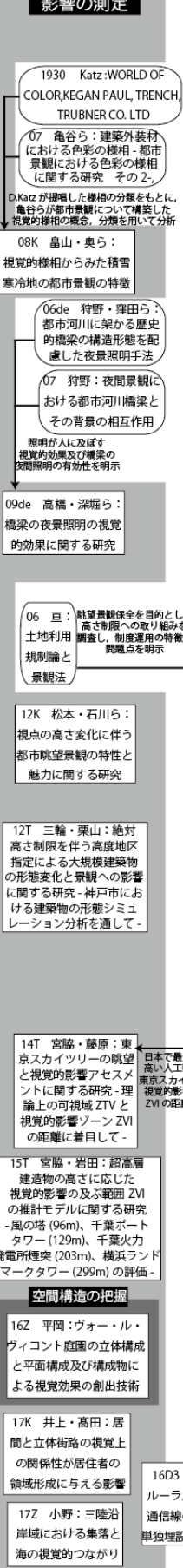


図-6 研究系譜図(変動要因の影響把握, 評価軸の検討と方法論の確立, 属性による評価への影響把握など)

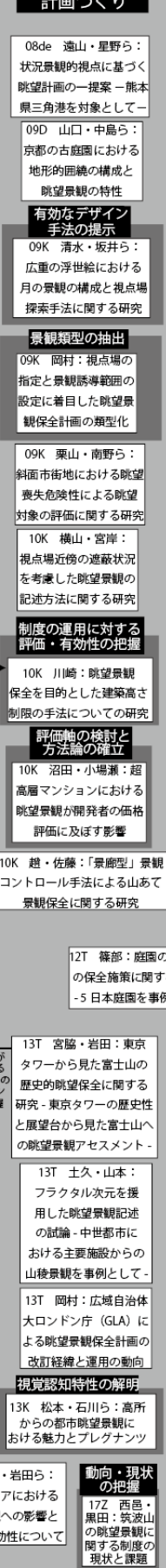
**視覚認知特性の解明**



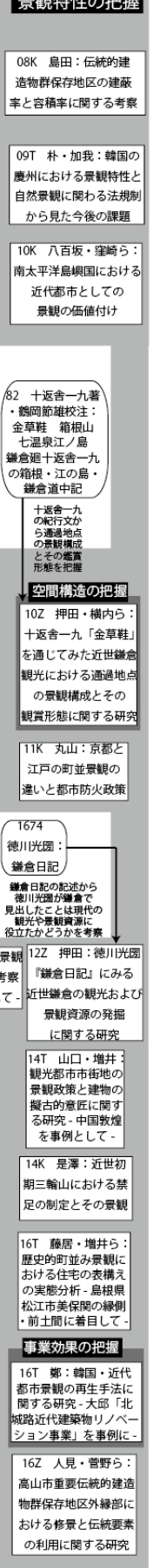
**視覚的効果・影響の測定**



**眺望を確保した計画づくり**



**歴史的な所の景観特性の把握**



**景観構成要素と全体評価との関連性の把握**

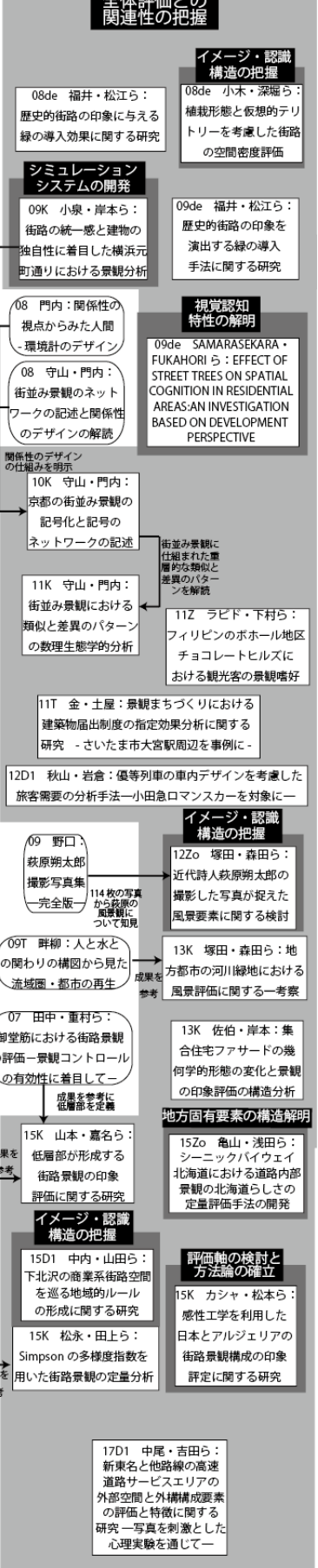


図-7 研究系譜図(視覚認知特性の解明, 視覚的効果・影響の測定, 眺望を確保した計画づくりなど)

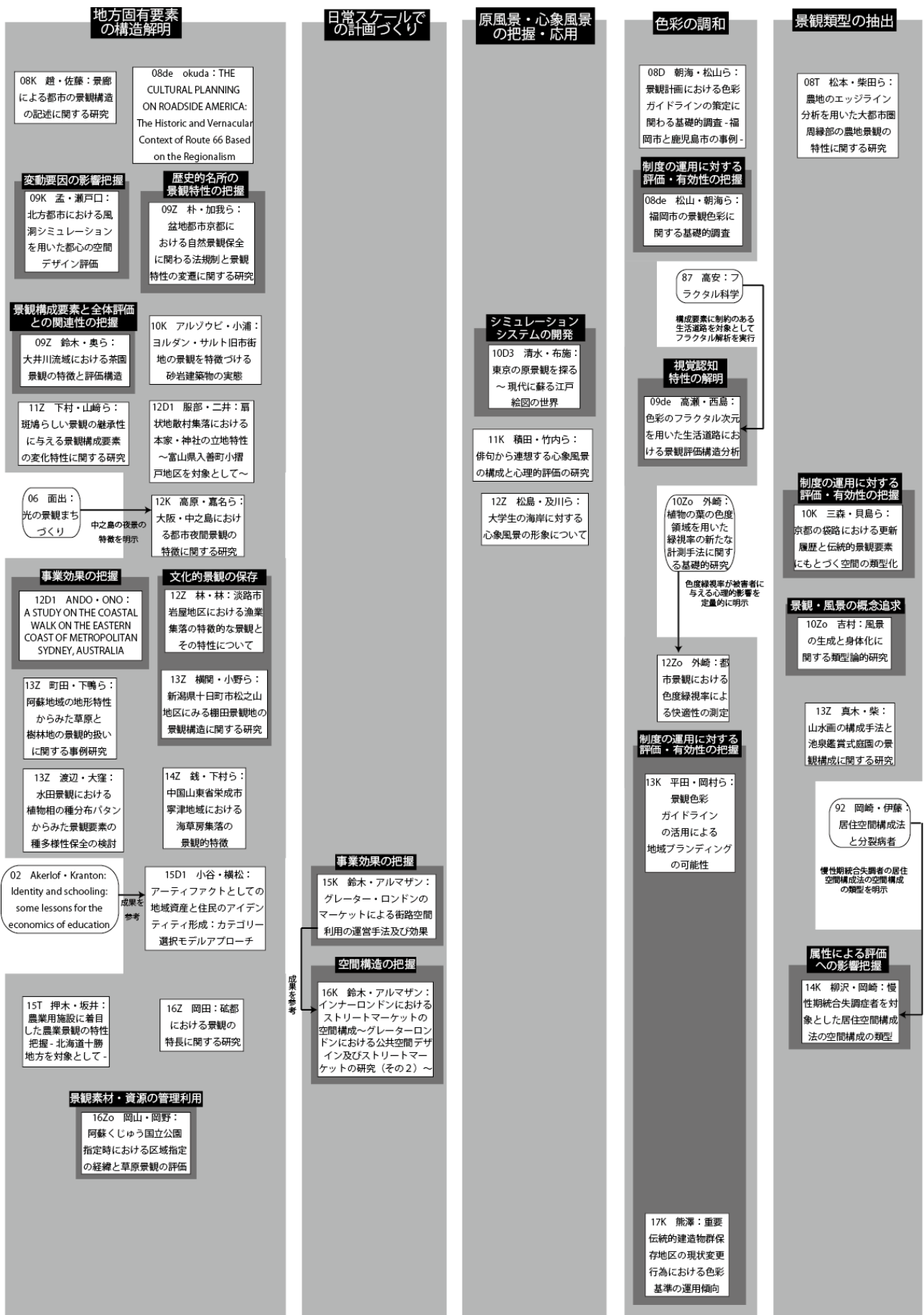


図-8 研究系譜図(地方固有要素の構造解明, 日常スケールでの計画づくり, 原風景・心象風景の把握・応用など)

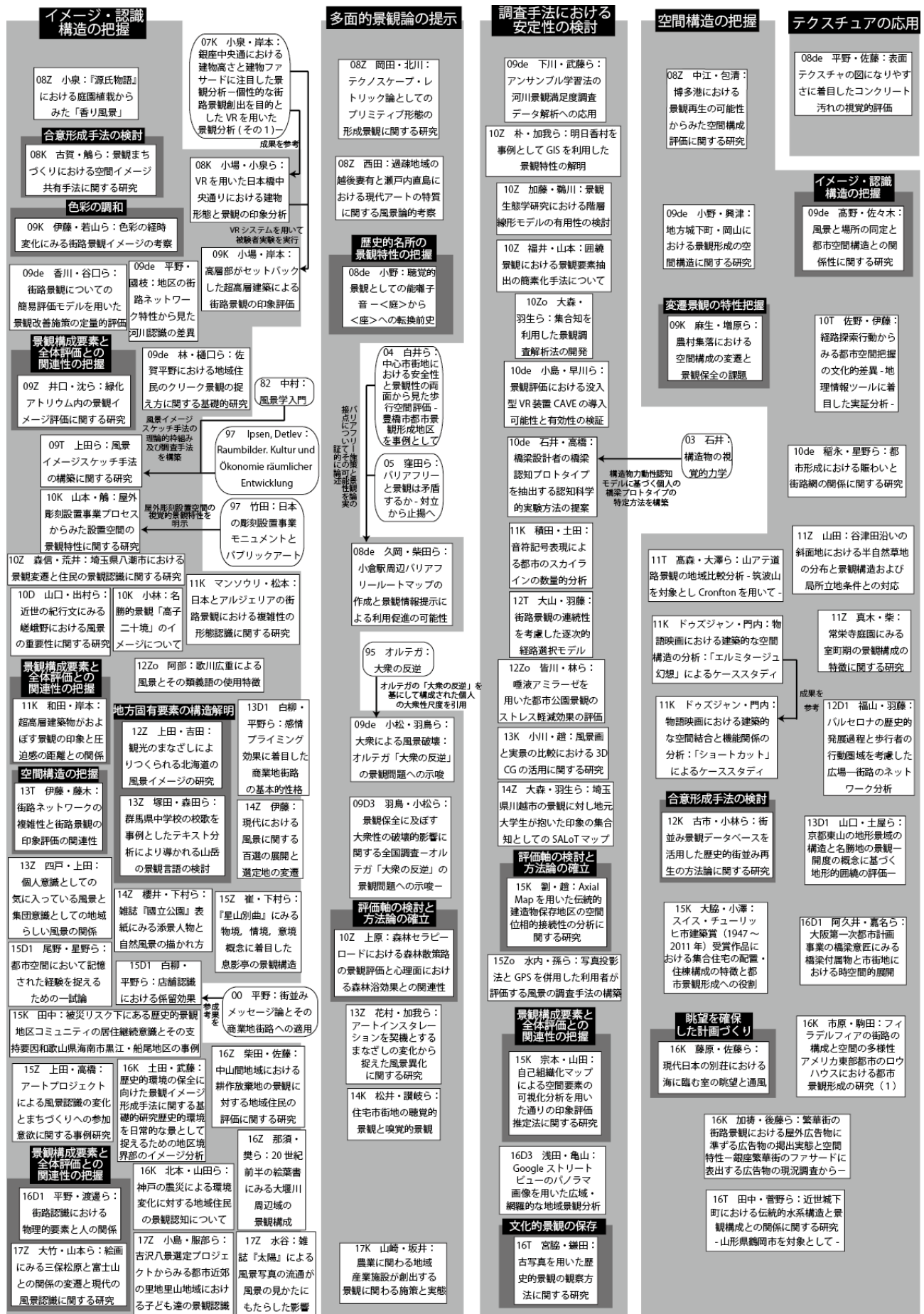


図-9 研究系譜図(イメージ・認識構造の把握, 多面的景観論の提示, 調査手法における安定性の検討など)

と全体評価との関連性の把握]も継続的に行われており、[地方固有要素の構造解明]研究として、洪水対策に用いられてきた地場材料の玄武岩に着目した集落景観構成とその変容を明らかにしたもの<sup>43)</sup>や地域資産と住民のアイデンティティ形成に着目した研究<sup>44)</sup>などが見受けられる(図-8)。また研究数は少ないものの98年~07年では見られなかった[日常スケールでの計画づくり]研究が2編抽出され、[原風景・心象風景の把握・応用]や[色彩の調和]研究も散見される(図-8)。

#### f) 景観に対する認識ならびに多面的評価とその手法論

上記視覚的景観論から心的な景観評価への影響を論じた[イメージ・認識構造の把握]研究がこの10年においても多数行われている(図-9)。従来の研究と同様に景観イメージ画像を用いた評価実験に対する定量的分析が特に建築分野で多くみられる一方で、感情プライミング効果に着目した商業地街路の認知を明らかにした研究などが土木分野において論じられている<sup>45)</sup>。さらにテキストマイニングによる分析<sup>46)</sup>も散見され、都市空間において記憶された経験に着目し、その特性を論じた研究等も見受けられる<sup>47)</sup>。さらに景観解釈の多面性や可能性を論じた[多面的景観論の提示]研究も見受けられ、森林散策路における心理面の評価と空間評価との関係性を分析したもの<sup>48)</sup>や地域産業施設の建築規模や植栽の実態を明らかにすることで景観施策のあり方について論じたもの<sup>49)</sup>もみられる(図-9)。

最後に景観を把握・分析する手法の精度や有効性を検証する[調査手法における安定性の検討]研究が継続的に行われており、プローブパーソンデータを用いながら街路景観の連続性によって与えられる回遊行動への影響を論じた研究<sup>50)</sup>や、Axial Mapを用いた街路空間の接続性について分析した研究<sup>51)</sup>等が見受けられる。一方、98~07年では見られなかった[テクスチュアの応用]研究が1編抽出され、コンクリート構造物の汚れに対する視覚的評価がなされている<sup>52)</sup>。

## 4. まとめ：景観研究の動向と今後の課題について

先行研究<sup>1)</sup>より景観研究が行われ始めた揺籃期から初期にかけては、公害問題に揺れる社会情勢も相まって、自然環境保全の研究対象として景観が論じられていたことは既に明らかとなっている。一方08~17年において特徴的な研究動向として、[景観素材・資源の管理利用]や[文化的景観の保存]、さらに98~07年には抽出されなかった[植生景観の史的解明]研究の増加している傾向が把握された。荒廃の深刻な自然的かつ伝統的風景の保全と我々の生活を支える社会基盤施設整備との整合に

対して、景観研究の成果がいかに関与できるか、今後の研究課題として再提起されているように推察される。

一方で[地方固有要素の構造解明]や[事業効果の把握]研究において、防災施設に対する地場材料や自然素材等の積極的活用に関わる論考が散見された。震災や近年多発している豪雨、台風被害に対する復旧・復興事業のあり方は今後もますます重要な検討課題となることは必至といえる。震災後の既に完成している施設の評価を含め、人々の暮らしを守る防災事業と景観的な魅力をどのように両立させていくか、思想的な論考と具体的な手法論の成果が今後もより重要な研究課題として求められるものと考えられる。

さらに景観研究の全体傾向として2010年をピークに研究数の減少が把握され、特にこれまで一定の論文数と成果が出され続けてきた[有効なデザイン手法の提示]研究が減少している傾向が看取された。事例を中心としたデザインプロセスの詳述はもとより、そうしたデザインを可能にさせた人的体制や制度ならびに設計前に貢献した調査分析、計画論上の工夫点についても、さらなる研究成果の蓄積が求められよう。

## 参考文献

- (土木学会論文集 D:土論 D, 土木計画学研究論文集:土計, 土木学会論文集 D3:土論 D3, 土木学会論文集 D1:土論 D1, 日本建築学会計画系論文集:建築, 日本都市計画学会学術研究論文集:都計, 景観・デザイン研究論文集:景デ, 日本造園学会「ランドスケープ研究」:造ラ, 日本造園学会「ランドスケープ研究(オンライン論文集)」:造ラオと表記, 発行年は西暦下2桁)
- 1) 柴田久, 土肥真人:目的別研究系譜図からみた景観論の変遷に関する一考察, 土木学会論文集, Vol. 675, pp. 99-111, 01
  - 2) 柴田久, 石橋知也:目的別系譜図にみる景観研究の動向-98年から07年を対象として-, 景デ, No. 7, pp. 121-132, 09
  - 3) 岡本昌, 真田純子:徳島県の棚田・段畑の石積み継承に向けた維持管理状況と技術に関する研究, 土論 D1, Vol. 72, No. 1, pp. 1-12, 14
  - 4) 木村真也, 村上修一:中山間地域における茶園景観に関する研究-滋賀県東近江市奥永源寺地域について-, 都計, Vol. 46, No. 3, p. 151-156, 11
  - 5) イシザワ・マヤ, 石川幹子, 福井弘道:アンデス農村地域の文化的景観の変容, 都計, No. 44-3, pp. 427-432, 09
  - 6) マッテオ・ダリオ・パオルッチ:法律システムからみたイタリアにおける文化的景観の保存, 都計, Vol. 43, No. 3, pp. 529-534, 08
  - 7) 小浦久子, 秋月裕子:景観の公益に対する再生可能エネルギーの公益との調整にみる計画課題, 都計, Vol. 52, No. 3, pp. 1171-1176, 17
  - 8) 神山藍, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦:京都北山の山容景観についての考察, 土論 D, Vol. 64, No. 2, pp. 266-278, 08
  - 9) 山田拓広:桂離宮庭園の樹林景観の変遷に関する一考察, 造ラ, Vol. 73, No. 5, pp. 367-372, 10
  - 10) 岡辺重雄:重要伝統的建造物群保存地区内の隣地越境屋根建築を保全する際の建築法令における対応策の研究, 建築, Vol. 81, No. 719, pp. 143-151, 16

- 11) 小浦久子: 景観と土地利用の相互性にもとづく景観計画の開発管理型運用の可能性, 都計, Vol. 48, No. 3, pp. 585-590, 13
- 12) 西村拓也, 松川寿也, 中出文平, 樋口秀: 景観法と連携した自然公園法の許可制度の運用実態に関する研究-自然公園特別地域での上乘せ基準に着目して-, 都計, Vol. 51, No. 3, pp. 292-298, 16
- 13) 藤倉英世, 山田圭二郎, 羽貝正美: 基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する研究-長野県旧開田村の景観を巡る政策群を対象として-, 土論 D3, Vol. 68, No. 3, pp. 160-179, 12
- 14) 宮脇勝: イタリアの文化財と景観の法典(ウルバーニ法典)の展開とその景観計画と景観アセスメントの研究, 都計, Vol. 44, No. 3, pp. 421-426, 09
- 15) 中島直人: 自治体首長を対象とした都市デザイン教育に関する研究-米国における都市デザイン市長協会(MICD)の活動に着目して-, 都計, Vol. 45, No. 3, pp. 205-210, 10
- 16) 熊澤貴之: 英国ハムステッド・ガーデンサーバブ・トラストによる景観デザイン審査の運営要因, 都計, Vol. 47, No. 3, pp. 601-606, 12
- 17) 下村泰史, 佐藤久恵: 風景づくりと流域市民のコミュニケーション 天若湖アートプロジェクト, 造ラ, Vol. 75, No. 5, pp. 655-660, 12
- 18) 笠間聡, 松田泰明: 景観の効果の発現モデル試案に基づく景観整備効果の発現傾向の分析と試案の検証, 土論 D3, Vol. 71, No. 5, pp. 281-292, 15
- 19) 米本浩也, 栗山直也, 村橋正武, 大窪健之: 景観形成の経済効果を考慮した市街地景観の整備方策に関する研究-京都市の歴史的市街地を対象として-都計, Vol. 44, No. 3, pp. 409-414, 09
- 20) 井上薫, 杉本南, 清水裕之, 大西暁生, 村山顕人, 大月淳: グリーンインフラストラクチャの概念を用いた浸透性街路空間デザインの導入効果, 建築, Vol. 76, No. 660, pp. 335-340, 11
- 21) 宋曉品, 池田孝之, 安里直美: 重点地区景観形成基準の策定プロセスとそこにおける住民と行政との調整について, 建築, Vol. 75, No. 648, pp. 411-418, 10
- 22) 福田知弘, 田口正晴, 清水彩子, 孫磊: 景観検討を対象としたクラウドコンピューティング型 VR による分散同期型検討会議の実現可能性, 建築, Vol. 76, No. 670, pp. 2395-2401, 11
- 23) 阿部俊彦: 気仙沼市内湾地区における防潮堤の計画とデザインの合意形成プロセス, 土論 D1, Vol. 73, No. 1, pp. 37-51, 17
- 24) 清水英範, 布施孝志, 中田真人: 江戸の都市景観の再現に関する研究, 土論 D, Vol. 64, No. 3, pp. 473-492, 08
- 25) 松井大輔, 窪田亜矢: 神楽坂花街における町並み景観の変容と計画的課題, 建築, Vol. 77, No. 680, pp. 2407-2414, 12
- 26) 林倫子: 京都鴨川川中における明治期の夏季納涼営業の変遷-日出新聞・京都日出新聞の記事を中心に-, 土論 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 26-36, 15
- 27) 石橋知也, 柴田久: 1960年代の福岡市政の変遷にみる都市戦略のあり方に関する史的考察, 土論 D1, Vol. 70, No. 1, pp. 1-15, 14
- 28) 伊藤弘: 大正から戦後にかけての国立公園行政における多島海景観としての松島の評価, 建築, Vol. 75, No. 656, pp. 2391-2396, 10
- 29) 金井雄太, 福井恒明: 近世竹田における城下町設計の論理, 土論 D1, Vol. 69, No. 1, pp. 1-12, 13
- 30) 八尾修司, 山口敬太, 川崎雅史: 戦前期大阪における公園道路網計画と桃ヶ池・田邊公園道路の形成, 土論 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 95-107, 15
- 31) 山口敬太: 大正期の琵琶湖南部における「風景利用」計画と名勝仮指定による景勝地の保護と利用, 造ラオ, Vol. 10, pp. 5-13, 17
- 32) 蛭田有希, 石川幹子: 市街地における基質的な景観構造が気温に与える影響に関する研究, 都計, Vol. 48, No. 3, pp. 1035-1040, 13
- 33) 西村亮, 中井裕裕, 中西正彦: 団地建替事業における民間分譲敷地の景観継承の評価に関する研究-桜堤団地を事例として-, 都計, Vol. 45, No. 3, pp. 781-786, 10
- 34) 真田純子, 中埜智親, 伊賀達也, 篠原修: 都市内高架橋における事後景観評価手法の検討, 景デ, No. 8, pp. 1-10, 10
- 35) 平野勝也, 川端剛弘: 建造物の景観評価における文脈依存性擁壁を例に, 景デ, No. 9, pp. 83-89, 10
- 36) 奥敬一, 深町加津枝, 三好岩生, 堀内美緒: 大井川中流域の茶園卓越景観における日中の来訪者による景観認識比較, 造ラ, Vol. 72, No. 5, pp. 657-660, 09
- 37) 大石智広, 稲垣栄洋, 高橋智紀, 松野和夫, 山本徳司, 栗田英治: 静岡県内の農業景観の選好特性の属性間比較, 造ラ, Vol. 72, No. 5, pp. 889-892, 09
- 38) 佐々木葉, 佐々木哲也: 歴史的ボーストリングトラスを転用したりんどう橋のデザイン, 景デ, No. 5, pp. 17-26, 08
- 39) 伊藤登, 横山公一, 高堂治: 新たな変形特性による鋼製橋梁用車両防護柵の開発, 景デ, No. 5, pp. 27-34, 08
- 40) 國井洋一, 古谷勝則: フラクタル解析を用いた尾瀬国立公園におけるシークエンス景観の定量分析, 造ラ, Vol. 73, No. 5, pp. 585-588, 10
- 41) 是澤紀子: 近世初期三輪山における禁足の制定とその景観, 建築, Vol. 79, No. 700, pp. 1433-1439, 14
- 42) 押田佳子, 横内憲久, 岡田智秀: 十返舎一九「金草鞋」を通じてみた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその観賞形態に関する研究, 造ラ, Vol. 73, No. 5, pp. 519-522, 10
- 43) 國居郁子, 工藤和美, 山崎寿一: 地場材料玄武岩に着目した集落景観構成に関する一考察, 建築, Vol. 76, No. 665, pp. 1241-1249, 11
- 44) 小谷仁務, 横松宗太: アーティファクトとしての地域資産と住民のアイデンティティ形成: カテゴリー選択モデルアプローチ, 土論 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 10-25, 15
- 45) 白柳洋俊, 平野勝也, 和田裕一: 感情プライミング効果に着目した商業地街路の基本的性格, 土論 D1, Vol. 69, No. 1, pp. 90-99, 13
- 46) 塚田伸也, 森田哲夫, 橋本隆, 湯沢昭: 群馬県中学校の校歌を事例としたテキスト分析により導かれる山岳の景観言語の検討, 造ラ, Vol. 76, No. 5, pp. 727-730, 13
- 47) 尾野薫, 星野裕司, 増山晃太: 都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論, 土論 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 133-150, 15
- 48) 上原三知: 森林セラピーロードにおける森林散策路の景観評価と心理面における森林浴効果との関連性, 造ラ, Vol. 73, No. 5, pp. 413-416, 10
- 49) 山崎嵩拓, 坂井文: 農業に関わる地域産業施設が創出する景観に関わる施策と実態-十勝地方の帯広都市圏における地域産業施設の建築規模と植栽に着目して-, 建築, Vol. 82, No. 732, pp. 433-442, 17
- 50) 大山雄己, 羽藤英二: 街路景観の連続性を考慮した逐次的経路選択モデル, 都計, Vol. 47, No. 3, pp. 643-648, 12
- 51) 劉澤, 趙世晨: Axial Map を用いた伝統的建造物保存地区の空間位相的接続性の分析に関する研究, 建築, Vol. 80, No. 716, pp. 2283-2292, 15
- 52) 平野勝也, 佐藤俊介: 表面テクスチャの図になりやすさに着目したコンクリート汚れの視覚的評価, 景デ, No. 5, pp. 77-84, 08